

---

# 朱き龍の伝説

神崎 ゆりあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

朱き龍の伝説

### 【コード】

N2196M

### 【作者名】

神崎 ゆりあ

### 【あらすじ】

『封印のほころ』で封印されていた魔物、その封印が解けた。

その龍を再び封印するために立ち上がる一人のハンターの話。

## 1 - 0 ・ 男の報告

風が駆け抜けた。

まだ、空は明るい。

しかし、人々の表情は暗かった。

まるでこの世のおわりだと言わんばかりの表情に、その村は静まり返る。

「封印が、解けたのか。」

群集の最前、たくましくヒゲを生やした村長らしき人物は一人の男の前に立つ。

この村、ココット村は雪山に囲まれた少し暮らすには気温の低い村である。

だが、モンスターから身を守るのに適した環境であり、人々は長年住む間に環境に適応していった。

「正確に言つと、解けたわけじゃないみたいで…。」

男は体にいくつもの傷を負っていた。

村長の命で、『封印のほこら』へと日々の日課として様子を見ていたのである。

「つまり、誰かが…、ということじゃな？」

男はコクリと頷く。

群集はざわざわと口々に自身の思いを口にだし始めた。

「何と言つことじゃ。」

村長はそれだけを言い残すと、フラフラとどこかへ行ってしまった。

集まっていた村人たちも、時間が経つとともに散り散りになり、村の広場にはその男一人が取り残された。

## 1 - 2 ・男の報告（2）

傷だらけの体を引きずりながら、男は自分の家へ歩いて行った。

て  
村の人々もどうかしちまった。怪我人だと聞いて放っておくなん

家に着くと、アイルーが一匹、玄関の前に座っていた。

「おお、ナイト、今帰った。」

ナイトと呼ばれたアイルーは、にゃあ、と一言返事すると、自分専用で作られたドアから家の中へ入った。

4

男も続き、家へ入った。

「ご主人、今日は何にするにゃ？」

「じゃあ、龍頭チーズバーガーでも。」

ナイトはオトモアイルーであり、給仕アイルーであった。

他にも沢山の仕事をこなす、このようなアイルーを万能アイルーと  
いって重宝されているのだが、そのうちの一匹というわけである。

「そんなファーストフードばかりで大丈夫かにや？」

小言をいいながらナイトはせっせと龍頭を切りはじめる。

「ちょっと、隣、行ってくる。」

「分かったにや。」

男は家を出て行った。

## 1 - 3 ・ 4 匹のアイルー

「ただいま。」

男が帰ると、テーブルには二人分の龍頭チーズバーガーが並んでいた。

ナイトの姿が見当たらない。

名前を呼ぼうとしたが、テーブルの上にあるメモに目が止まった。

《急用ができたにや。すぐに戻れたらいいけど、そうもいかないにや。頼りにしてるにやよ。》

「ナイト…。」

傷だらけの体をしっかり消毒し、手当てしたあと男は眠れない夜を過ごした。

「ご主人、ごめんにや。だけど、僕にはやるべきことがあるにや。」

その日、ココット村にいた万能アイルー4匹は村から姿を消した。

アイルーの名はナイト、クイーン、ジャック、ジョーカー。

『封印のほころ』の魔物が解放された今、彼等には使命がくだされた。

4匹は『封印のほころ』に集まった。

## 1 - 4 ・ 4 匹のアイルー (2)

『封印のほこら』に集まった4匹のアイルー達は、お互いが今まで生きていたことを喜びあった。

ハンターのオトモとして、給仕アイルーとして働く内は、こうしてアイルー同士が集うことはないのである。

ジャックは村の青年ハンターのもとで働いていた。

青年はジャックにとてもよくしてくれていたので、ジャックは少し小太り体型に。

クイーンは村の最年少少女ハンターのもとで働いていた。

少女が村の最年少ハンターでいられたのはクイーンの性格あったものかもしれない。

クイーンは世話好きで、時に厳しく、時に優しく、飴と鞭で少女を鍛えたに違いない。

ジョーカーは村長の家に仕えていた。

何匹もいるアイルーを束ねるリーダー格のアイルーだが、本来は孤独を好んでいた。

一度、村長から頼まれたことを、一人でこなし、全員でやったと嘘の報告をした。

そして、ナイトは熟練ハンターの男の元で働いていた。

男がこれまで戦死しなかったのはナイトのおかげであることに違いない。

はっきりいって、あの男の実力は皆無。

ナイトはそれでもあの男を支えてきた。

ここへ来る途中、出くわすモンスターなど運が悪くてランポス程度なのに、あの男は傷だらけになって帰ってきた。

それが、その証拠である。

4匹のアイルルは、各々が話をしながら、『封印のほころ』の奥へ進んで行った。

### 1 - 5 ・ 4 匹のアイルー ( 3 )

「うわあ、見事にやられちゃってるにやあ。」

ジャックはまじまじと封印の解けた剣を見ている。

歩く度にポヨンとお腹が揺れるジャックを尻目にクイーンは冷静に全員を見ていた。

「あ、これ、綺麗だにやあ。」

封印が解け、粉々に飛び散った封印石は確かに綺麗な光を放っていた。

薄暗い『封印のほころ』ではなおのこと目立つ。

「ナイト、そんなもの拾ってないでさっさと調べてよ。」

ナイトは拾いかけていた封印石のかけらを元の場所に置いた。

「はっ、確かに。こんなことしてる場合じゃないにや。」

そういうと、ジャックの隣に並んだ。

二人が並ぶとジャックは確かに小太りである。

「ねえ、ナイト。僕たちで大丈夫にゃのかにゃあ。」

不安げな表情を浮かべるジャック。

「きっと大丈夫にゃ。僕らには明日があるにゃ。」

にこっとジャックに笑顔を向けると、ジョーカーがクスクスと笑った。

「なんだよ、ジョーカー。」

「いや、別にたいしたことではない。」

ナイトは青、ジャックは白、クイーンは桃色、ジョーカーは黒。

カラフルなアイルー達はその夜遅くに解散した。

## 2 - 0 ・旅立ち

再び彼等が集まったのは、太陽もちょうど正午を射している時だった。

「これで、全員かじゃ。」

ナイトは分かりきった猫数を数えるように、指で指していく。

「揃ったじゃ。んで…」

ナイトの視線はジャックに行く。

それにつられて、ジョーカーとクイーンの視線もジャックへ。

ジャックは頭にクエスチョンを浮かべた。

「ジャックの武器は、それはなんじゃ？」

ジャックは自分が背負っている武器を出した。

「ライトボウガン、白銀にや。」

いや、そうじゃなくて。

「どうして銃身しかないの、って聞いてるのよ。」

クイーンがナイトの聞きたいことを言ってくれる。

「それじゃ、使い物にならないでしょ。」

もっともだ。

ジャックは、うなだれてライトボウガン白銀の銃身を背負いなおした。

「だって、ご主人様のライトボウガン、重かったにや。」

ふう、とため息を着いたのはジョーカーだ。

「そ、そろそろ出発するにや。」

ナイトは前を向いた。

その方向には壮大な森と丘が広がっている。

「ジャックは、行くまでにその銃身を使えるものに加工作ればいいにゃ。」

ジャックはまだしょんぼりしている。

4匹のアイルは、ココット村にさよならを告げ、歩きだした。

## 2 - 1 ・旅立ち(2)

「そろそろベースキャンプにや。」

ナイトが先頭を歩く。

その背には、ナイトの主人が昔剣士だったころのランス、アクエリアスが背負われている。

次に歩くのはジョーカー、並んでクイーン。

ジョーカーの背には太刀、鬼哭斬馬刀・真打が。

クイーンの背には双剣コウリュウノツガイがあった。

最後尾を歩くのはジャック。

ジャックの背には、ライトボウガン白銀の銃身のみ。

「よく、こんな優秀な武器が集まったにや。」

「別に隠してただけよ。」

「村長には悪いが、勝手に拝借した。」

「僕は…。」

そんなことを口々に言いながら目的地に着いた。

「森と丘にや。ここでとりあえず休憩にや。」

辺りは薄暗くなっていた。

ベースキャンプに着くと、アイテムボックスを探る。

前に来たハンターが何かを残しているかもしれない。

正式にギルドから依頼されたわけではないので、支給はされていないが、もしかしたら、というのがああるかもしれない。

「地図にや。」

ナイトはアイテムボックスから地図を取り出し、広げた。

「作戦会議にや。これから…」

ナイトが話しはじめると、ジョーカーが立ち上がった。

「ちょっとそこまで。」

そういって、フラフラとどこかへ行ってしまった。

「全く、集団行動がなってないにや。」

広げた地図をクイン、ジャックの前にずっと引きずり、ベースキャンプの位置を指差しながら説明を始めた。

## 2 - 2 ・旅立ち(3)

薄暗いが、全てが闇というわけではない。

この辺は月明かりも地面を照らしてくれる。

正直、独りがいい。

ジョーカーは火龍リオレウスのねぐらへ足を踏み入れて行った。

自信があったわけでもない。

ただ、集団行動の中に身を置くことむしろしゃしゃってくる。

その晴れない心を太刀を振るうことで晴らしてきた。

さて、行くか。

ジョーカーの目の前にはつがいで眠るリオレウスとリオレイア。

自分達の卵を大事そうに守りながら眠っている。

「悪いな。」

そうつぶやくと、ジョーカーはリオレイアの首を一刀両断。

リオレイアは声をだす間もなく絶命した。

飛び散った鮮血を身軽に避け、懐のポーチから音爆弾を取り出した。

それを壁に向かって投げつける。

カキーンっ

鋭い音が響く。

目を覚ましたリオレイウスはたちまちの内に立ち上がり、ジョーカーに狙いを定める。

「ギヤアーオっ。」

「行くぞ。」

ジョーカーは背負っていた鬼哭斬馬刀・真打を構え、迫り来るリオ  
レウスに向かって行った。

## 2 - 3 ・リオレウスvsジョーカー

「何か聞こえたにや？」

テントで横になるジャックとクイーンにナイトが話しかける。

「ええ、確かに聞こえたわ。」

クイーンは半身を起こす。

つられてジャックも起き上がる。

「火龍の泣き声にや。」

ジャックが答える。

辺りを見渡すと、まだジョーカーの姿はない。

「まさか、ね。」

「まさか、にや。」

再び横になる。

テントは月明かりに照らされ、長い夜を迎える。

…

突進、突進、突進。

それらを見事にかわす。

かわすのと同時に、一太刀をいれ、二太刀を入れていく。

刀身からは雷属性の証であるビリリっつと青白い光が放たれる。

雷牙獣ラージャンの洗礼を受けた鬼哭斬馬刀・真打は火龍リオレウスに鋭くダメージを与えていく。

「ギユウオ…」

鳴き声に変化する。

それと同時に火龍の攻撃は勢いを増す。

火龍は空気中の酸素を体内の火炎袋と化学反応させ、ブレスを吐きかける。

ジョーカーは、紙一重でそれをかわす。

ほっぺの毛がチリリと焼ける音がした。

「くそつ。」

火龍の攻撃は止まらない。

いくつもの火炎弾を口から吐く。

次々と繰り出される火炎を全てかわしていく内に、ジョーカーは壁の端に追い詰められた。

「ギヤアア……」

リオレウスはいつそう強く息を吸い込んだ。

口の中の火炎は、その激しさのあまり周りに漏れだす。

ジョーカーはリオレウスが見せたその隙を見逃さなかった。

タンッ

地面を大きく蹴り、一気に加速。

リオレウスの懐に入り、喉元に鬼哭斬馬刀・真打を突き立てた。

「グウ……」

ジョーカーは滴り落ちるリオレウスの灼熱の血を体中に浴びながら、そのまま気絶した。

## 2 - 4 ・リオレウス vs ジョーカー (2)

「う…、ここは？」

目を開くと光が一斉に入り込んできた。

自分は確か、リオレウスの灼熱の血を浴びて…

浴びて、無事なのか？

「あ、目、覚めたみたいだよ。」

聞き覚えのある声。

頼りない、小太りの声。

ジャックだ。

「ジョーカー、ジャックに感謝しなよ。ジャックがジョーカーを見  
つけなかったら今頃…」

今頃？今頃、俺は…

「そうよ、ジョーカー。ちゃんとありがとうとひくひくいってときなさいよ。」

ありがとう、か。

少し無理に体を起こそうとしてみた。

体中が焼けるように痛む。

力が入らない。

「はあ…。」

何とか声は出た。

「あ、あり、ありがとう。」

その声を聞いたナイトとクイーンはにっこりして、ジャケットをみる。

ジャックはなんだかうれしそうだ。

「ジョーカー、立てる？」

いや、無理だ。

「む、無理。」

呆れたような仕種でナイトはジョーカーを見る。

俺をそんな目で見るな。

声にならない。

「じゃあ、ジャック。残ってくれる？」

ナイトは提案する。

ジャックは迷わず、頷く。

どうやらジャックはジョーカーに気に入られたようだ。

「必ず追いついてね。」

そういって、クインとナイトは森と丘を後にした。

残された二匹のアイルはテントの中で暖かい日差しが木々を照らすのを見送った。

### 3 - 0 ・朱き龍の存在

「ナイトおー、どこだー。」

ココット村でのこと。

男は自分に仕えていたアイルーを探していた。

時を同じくして、村長や村の青年、最年少女ハンターも同様だった。

少し経って、村から4匹のアイルー達が消えたことが噂になった。

4匹の居場所は…？

小さな村では、いろんな噂が立つ。

雪山の主、ティガレックスにやられただけの、封印の龍に食われただけの。

いずれにしても、自分のアイルーを失った者達は気が気ではなかった。

朝から晩まで探し回っては、家で眠れない夜を過ごす。

そのためか、自分達の武器が少しずつ無くなっていたとしても、それに気づくものはいなかった。

最年少女ハンター、名をリツカという。

リツカは、オトモアイルー・クイーンとともにハンター修業をやり直し、ようやくハンターとしてこれから、というときだった。

「私、クイーン探しの旅に行ってきます。」

どこにいるかわからないものを、と言って村の者達は止めたが、彼女は聞かなかった。

村の者達はクイーンがもし村で見つかったら手紙をだす、その時はちゃんと戻ってくるようにと言って聞かないリツカを見送った。

「この村もまた一つ、淋しくなったな。」

村長は夕日に向かってそそくしくさへく。

### 3 - 1 朱き龍の存在(2)

飛び交うマグマは、足元で散った。

さすがに気温も上がる。

火山エリアに着いた二人は、それぞれの武器を取り出し、手入れをする。

火山エリア、ベースキャンプ。

「ねえ、ここって。」

「そうじゃ。火山エリアじゃ。」

「そりゃわかるわ。どうして火山なのかってことよ。」

ナイトは小さくなった砥石を、足元に転がすとキャンプのベッドに腰をかける。

「あれ？クイーンは知らないじゃ？封印されてた龍のこと。」

「だって、あの話、お伽話だと思ってよく聞いてないんだもの。」

呆れた猫にや。

口にはださなかったが、顔にでた。

しかし、すぐにその表情をもどす。

「朱き籠って言われてるにや。名前はないにや。」

誰かがつける前に村の英雄に封印されたからにや。

ただ、その英雄は自らの命と引き換えに封印したらしいのにや。」

ナイトは新しい砥石を取り出す。

「私がききたいのは、どうして火山なのかってことなの。」

クイーンは長い話は苦手のようだ。

はいはいこや。

「朱き龍だから、火山にや。」

?????

「はあ？」

クイーンは持っていたコウリュウウノツガイを背にしまった。

「それだけ？」

「そうにや。朱いっていったら、火山にや。」

二匹のアイルーは火山の奥へ足を踏み入れていった。

### 3 - 2 ・朱き龍の存在(3)

「もう、動けるかにや。」

銃身をゆらつかせながら、ジャックはテントに横になる仲間にかける。

火龍リオレウスとの激闘を繰り広げたその仲間は、前進にやけどをおっていた。

しかし、火炎弾を喰らったわけではない。

火龍リオレウスの血が灼熱のように熱いことを知らなかっただけである。

知らない、ということがこの自然界では大きなリスクとなる。

「ああ、もう、歩ける。」

ジョーカーはむくつと立ち上がると、手足を伸ばした。

思ったよりも体が動く。

ずっと、看病してくれたのか。

胸が熱くなる。

「ありがとう。」

小声でつぶやいた。

「ん？なににや？」

ジャックは聞き返す。

「なんでもない。行くぞ。」

照れて赤くなった顔を手で覆うように隠す。

「あいにや。」

先行くジョーカーを追うように、ジャックは着いていく。

道の途中、ジョーカーはジャックにリオレウスから剥ぎ取った素材を手渡した。

「白銀とまではいかないが、なんとかなるだろ。」

「僕、加工できないにゃ。」

ジョーカーはふん、と鼻を鳴らした。

「後で、俺がやってやる。」

二匹のアイルはナイトとクイーンがいる火山を目指した。

### 3 - 3 ・朱き龍の存在(4)

灼熱のマグマがあちこちから吹き荒れる。

一歩間違えば確実にその餌食となる。

「こわいじゃあ…」

ナイトは弱気だ。

それでも一歩一歩足を進める。

「そろそろ、見えて来るわね。」

クイーンの視線の先には火山エリア最大面積を誇る火山広場。

ある一説によれば、古炎龍テオ・テスカトルの元々の住家だと言われている。

広場まで来た二匹のアイルーは足を止めた。

「「わって…。」

「僕らはとんでもないものを、目指してたのにや。」

二匹のアイルールの視線の先には、朱く染まった双頭の龍がいた。

まだ、気づかれてはいない。

なぜこんな龍が、誰にも気づかれることなく今まで存在しえたか。

答えはすぐに閃く。

ここ最近、誕生、もしくは復活したからである。

「どつすんのよ、ナイト。あんなのに勝負挑んだって勝てっこないわよ。」

それはナイトにも十分分かっていた。

ただ、諦めるわけにはいかなかった。

ココット村の人たちのため、いや、全世界がまだこの危機を知らない内に救うのが僕の使命だと感じた。

「クイーン、力を貸してにや。」

ナイトはアクエリアスを引き抜く。

大きな盾に守られたナイトは、ゆっくりと朱き双頭の龍へにじり寄る。

「も、もちろんよ。」

肩にしょい込んだ双剣コウリュウノツガイを両手に持ち、ナイトの前に立つ。

「きっと、大丈夫だよね。」

「もちろんにや。」

二匹のアイルは、ゆっくりとまだ気づかない双頭の龍へ近づいて

い  
っ  
た。

### 3・5・朱き龍の存在(5)

ぐうぐうと轟く双頭の龍の咆哮に身が怯みそうになった。

二匹のアイルーは同時に両の足を攻撃した。

しかし、手応えはあったものの、その肉質の固さといったら尋常のものではなかった。

咆哮に怯んではられない。

しかし、両手は両耳を塞がずにはられない。

猫の聴覚のよさを恨んだことはなかったが、この時ばかりは都ってちぎりたくなった。

手に持つアクエリアスと盾とを起用に使い分けたおかげで、大きなダメージを負うことはなかった。

しかし、クイーンは違う。

盾のない突撃用の武器のため、防御を知らないに等しい。

フットワークで避けるのにも限界はある。

ましてや相手は伝説とまで言われた龍。

そう簡単には避けれない。

そうやって、クイーンは徐々に瀕死のダメージを蓄えていった。

そして、ついに、クイーンは倒れた。

「クイーン……。」

ナイトの声は届かない。

朱き龍の隙を見て、閃光玉を投げる。

到底効くとは思えないが、一瞬の時間を稼いだかった。

クイーンを安全なところへ。

駆け寄るとすぐにクイーンの首の下に手を入れ、持ち上げた。

閃光玉の効果が切れる。

一目散に火山広場を後にした。

「大丈夫かによあ。クイーン…。」

体を揺すっても、皮膚が痙攣しているのがあるだけで、意識は戻らない。

持っていたクーラードリンクをクイーンにかけた後、再び、火山広場へ向かった。

「クイーン、ごめんにゃ。必ず後で助けるにゃ。」

### 3 - 6 . 朱き龍の名は

火山広場に再び戻ったナイト。

朱き龍は火山広場に戻ってきたナイトを見つけると、朱き炎を口に蓄え、吐きかける。

ふいをつかれたナイトは避ける間もなく、盾を構える。

あ、熱いやあ。

火炎は盾を包み込む。

「にやあ…。」

止まない火炎は、防御をしているとはいえ、ナイトの命を削るように勢いを増していった。

その時、ドンっという爆音と共に火炎はナイトから遠退いた。

「ん？何事にああ？」

振り返ると、二匹のアイルーがこちらへ向かって来るのが見えた。

「じめんじゃ、ちょっと遅くなったじゃ。」

「あとは、俺がやる。」

ジャックとジョーカーだ。

ナイトはにこりと笑うとそのまま倒れ込んだ。

「二匹とも、ちょっと遅すぎじゃ。でも、ありがとじゃ。」

鬼哭斬馬刀・真打を抜くと、ジョーカーは朱き龍に向かう。

ジャックは白銀を構えると、水冷弾をマガジンに込める。

朱き龍は、再び火炎を蓄える。

「同じ手は食うかよ。」

ジョーカーは、一気に加速する。

「おおおー！」

気合いは十分。

一刀。

二刀。

三刀。

「まだまだだ。」

ジョーカーの波状攻撃。

続くようにジャックの水冷弾が朱き龍を襲つ。

グギヤアアアー!!!

けたたましい咆哮が二匹を襲う。

体が動かない。

何者をも屈させる恐怖。

攻撃の手が止まる。

朱き龍の足元、ジョーカーは必死で体に言い聞かす。

動いてくれ、俺の体。

咆哮が鳴り止まない内に、朱き龍は羽ばたき始める。

羽ばたきによって生み出される風圧はこれまでに受けたことも無い  
威力。

ジョーカーは吹き飛ばされた。

ジャックによって放たれた水冷弾も龍の羽ばたきによって墮ちる。

「助かったにや？」

白銀をしまい、朱き龍を見上げる。

「くそおつ。」

ジョーカーは鬼哭斬馬刀・真打をたたき付ける。

むぎむぎと見せ付けられた強さの違い。

この世のものがどうこうできるものじゃない。

朱き龍は、遙か彼方へ飛び立った。

あの方向は、シュレイド城にや…。

舞い散る粉塵を纏う姿を目で追うしかなかった。

### 3 - 7 ・戦士達の休息

全身に火傷を負ったアイルー達は、火山エリアのベースキャンプで倒れていたところを捜索隊アイルー達に発見され、近くの村まで送り届けられた。

「また、戻って来るとはにや。」

「せめて、全部片付けたあとにしたかったわね。」

全身火傷だらけの体を、消毒液で触られるとジンジンする。

「満身創痍…だな。」

並んだように転ばされ、治療を受けた。

ある程度治療が済むと、それぞれの飼い主が心配そうに迎えに来てくれた。

「おい、ナイト。君がいなきゃ、僕はだめなんだよ。」

ナイトは立ち上がり、えへへと笑った。

傷だらけの体を主人に抱えられ、家に帰った。

家につくと、まだ、ナイトが作ったご飯が食べずにとってある。

「うげっ、これ、腐ってるにゃ。」

少し色が変わった肉、異臭のする部屋。

蠅も飛んでいた。

「な、なんで食べなかったにゃ？」

ナイトは主人を見る。

主人は泣きながら答えた。

「君のいない人生なんて、いらないうって思えたから。」

ナイトは呆れたように、近くの椅子に座った。

火傷したお尻がひりひり痛い。

「何言ってるにゃ。強いハンターになるんじゃないのかにゃ。」

主人は涙を流しながら、ナイトをぎゅっと抱きしめた。

#### 4 - 0 ・新世界の扉

いつもと同じ毎日が始まった。

主人が受注し、ナイトが援護しながらモンスターを討伐。

かなりハードな毎日だったが、朱き龍にであった時から、イマイチな気分。

「もっと強いやつ、受注してにゃ。」

なんて、お願いしても、主人は首をふる。

「無理無理、もし、死んじゃったら、もともこもないし。」

確かにゃ。

と納得して、いつまでも叶えられぬものとなっていた。

.....

朱き龍、朱き龍。

ぶつぶつと言っているのは、村長のオトモアイルー隊長ジョーカー。

自分の太刀捌きが齒がたたなかつたことも悔しいが、それ以上に、村人の平和ぼけには一層腹が立つ。

「ったく、伝説の龍が現れたのに。」

……

クイン、ジャックは今の生活に満足していた。

むしろ、この二匹は平和に満足し、もう戦いなど懲り懲りだ等と思っっているに違いない。

……

「ねえ、私、あなたが言うその朱き龍に会ってみたいわ。」

クイーンは自分の主である最年少女ハンターに朱き龍の話をした。

もちろん、行かせるわけにはいかない。

こんな少女にあの力は危険過ぎる。

クイーンは首を振った。

……

世界は少しずつ変わろうとしていた。

#### 4 - 1 ・新世界の扉(2)

「シヨクモツレンサ？」

「そうそう、この生物界においての絶対の掟じゃ。」

ふうーん。

こうやって村長から新しい知識を得ながらの、ハンター家業の手伝いの毎日も悪くない。

ジョーカーの様子をちらちらと見ながら、村長と机を挟んで向かい合う。

なれない文字を必死に追いかけた。

何の役に立つか？

できるなら役に立つ場所なんて無ければいい。

しかし、ジャックは朱き龍の強さを目にしたときから、こつする他

に自分ができるとはなれと思つた。

## 4 - 2 ・新世界の扉 (3)

ここはポツケ村。

旅人が行き交う小さな村であったが、今は商工業の運輸の中心として繁栄しつつあった。

村の名物である伝説の剣は勇者によって抜かれ、今は『元・伝説の剣』として客を集めている。

実際には剣の刺さっていた穴しかないことから、がっかり名物などとの噂が広がる。

それでも、珍しい物見たさに来る客の足は止まらず、賑わううちに商工業の運輸の中心として繁栄していく。

「なあ姉ちゃん。ちょっと俺らと遊ばない？」

チンピラが二人、髪の毛の長い少女を囲んでいた。

じりじりと近寄ることに少女は後ろへ下がる。

とん。

背中が壁に当たる。

「ほら、逃げないで。」

少女は何も言わず、ただただチンピラを恐れるような目で見ている。

「やめときなよ。」

チンピラの背後から声がした。

「ん？」

振り返った二人のチンピラの目にはこちらをむく人の姿などなかった。

「おつかしいなあー。おい、ちょっと見てこい。」

チンピラの一人が声の方へ走っていき、キョロキョロと辺りを見回

して、何もいないことをもつ一人に伝える。

「空耳か…。」

チンピラは再び少女を囲む。

「だから、やめときなよ。」

空耳などではない。

今度はもっと近くで聞こえた。

二人はキョロキョロと見回す。

辺りに人らしい気配はない。

あるのは資材や機械、それにアイルーが一匹。

??????

アイルーが一匹。

「こ、こいつ…喋れるのか？」

チンピラの一人が指を刺す。

「だから、少女に手を出すのはやめときなよ。」

「構うか。」

アイルーの言葉に耳を向けず、少女に手を伸ばす。

もう一人のチンピラは、アイルーがその瞬間目をつぶったように見えた。

斬。

少女に手を伸ばしたチンピラの服が真っ二つに分かれ、華奢な体を空気にさらす。

「ん？」

チンピラは一瞬、少女へ伸ばした手を止める。

自分の服が、切られてる。

その事実気づいたときには、少女は目の前にいなかった。

いつの間にか、アイルーもいない。

チンピラはただ立ち尽くした。

……

「よく我慢できたわね。」

「ええ、私はもう大人なもの。」

少女とアイルーはポケット村のひとごみに姿を消した。

#### 4 - 3 ・新世界の扉（4）

なんだか様子が変わだ、直感的にそう思った。

なかなか眠れなかったナイトは、隣でぐっすり眠る主人を起こさないようにそっと布団を抜け出した。

ととと。

キッチンを横切り、ナイト専用のドアから外に出る。

いつもと変わらない星空が広がっている。

「ただの思い過ごしにゃ。」

ぼつり、独り言をつぶやく。

そのままドアにもたれ掛かり、夜空を見上げた。

「世界は、こつみると平和なんだけど、にゃ。」

物足りなさをなにかで補おうと試行錯誤しては見るものの、何も思い浮かばなかった。

「はあ…。」

深いため息をつく、白い息が出る。

ココット村はまだまだ冬が続く。

……

「起きてるのか？」

主人がドアを開けた。

「はいにや。」

起こしてしまったことを少し申し訳なさそうに下を向く。

「明日……」

ん？

「僕はポツケ村に行くよ。」

主人は空を見ながら、ナイトに話す。

「どうしてにや。」

「君があんまり深い顔してるから、どこか連れていこうと思って。」

「そ、そんな気を遣ってくれなくても…」

ナイトはわざとらしい笑顔を主人に向ける。

「……なんてね。ただ、行きたいだけさ。」

主人がそういうなら。

ナイトはだまって頷いた。

コロット村の夜は世界のどこよりもちょっとだけ長い。

#### 4 - 4 ・新世界の扉(5)

夜が明けたころ、支度をしたナイトと主人はココット村を発った。

道のりはアプトノス荷車で半日程度。

荷車で行けばあまりお金はかからないし、ゆっくり行くことができる。

……

着いたのは太陽が真上にあるころだった。

「この辺は、暖かいね。」

「はいにや。」

ココット村からずいぶんと標高の低いところにあるポッケ村はココット村よりもずいぶん暖かった。

「よし、さっそくギルドに行こう。」

ギルドにあるクエストはココット村のそれとは違ったものが沢山揃っていた。

「あ、これなんかいいじゃないか？」

クエストボードの一つを指差し、主人はナイトに確かめる。

『薬草10こ納品』

いやいや……

ナイトは首を振る。

ふと、テーブルに座る少女に目が止まる。

あの子は……。

「なあナイト、これは？」

『ティガレックス討伐』

いま、それどころじゃ…。

ん？

ティガレックス。

「よし、それにするにゃっ！」

主人の元に駆け寄り、びしっと人差し指を立てる。

「ご主人も分かってるにゃ。そーゆーのを期待してたにゃ。」

ナイトは得意そつに鼻を鳴らす。

「じゃ、受注しておくよ。」

「はいにゃ。」

いつの間にか少女はテーブルからいなくなっていた。

おかしいなや。

「ほら、ナイト。もう出発だつてや。」

「いま行くにや。」

主人とナイトは、雪山へ向かった。

#### 4 - 5 ・新世界の扉（6）

ティガレックス。

雪山の王者と呼ぶに相応しいその獰猛さは数々のモンスターと比べてもずば抜けているだろう。

「さて、ご主人。ティガレックスは山頂にや。」

「よく知ってるなあ。」

ナイトは主人の前を歩いた。

少し体より大きなランスを背負う。

途中、野生のアプトノスやギアノスに出くわしたが、目も触れずただただ山頂を目指した。

ポツケ村区域の担当する雪山はコロット村の雪山より少しだけ寒さが柔らかい感じがする。

山頂へは一本道。

すぐにたどり着いた。

ナイトはランスを構え、ティガレックスの来るのをいまかいまかと待った。

それに比べ、主人は山頂まで来るとどっかり腰をすえ、そのばに座り込んだ。

「なにやってるにや。」

「ちょっと、疲れた。」

はあー？

声にはださなかったが、表情から読まれたかも、と思ったがその心配もなく主人は座り込みホットドリンクを一杯。

ナイトにはふさふさの毛があるので、それには及ばないが、なんともだらし無い主人だ。

バサバサ。

天空からの羽音。

山頂近くの広場に影ができた。

見上げると、ティガレックス。

「来たな。」

主人はようやく重たい腰をあげると、持っている太刀を構えた。

最近流行りの太刀。

斬鉄剣。

主人がどーしてこれを持っているのかは不思議でたまらなかったが、聞いても教えてはくれない。

まさか、人のじゃ…。

なんて考えたが、そんな度胸があるようにも思えない。

ナイトはタケミカズチを構え、ティガレックスに目を向ける。

ドスン。

ティガレックスの着地。

着地と同時に咆哮。

どうやらティガレックスはナイトたちを敵として捕らえたようだ。

「戦闘開始にや。」

ナイトはつぶやいた。

4 - 6 ・新世界の扉(7)

「おいおい、ずいぶん呆気ないなあ。」

ティガレックスはズシンとその体を倒した。

体中にいくつもの傷跡。

それもナイトと主人のものでない傷が無数に。

「ま、一応、クリアってことで。」

主人はさほど気にも留めるそぶりはみせず、下山しきつとしていた。

「待つにゃ。ちょっと、これはおかしいにゃ。」

ナイトは主人を引き止めようと呼び止めた。

「そーゆーのは、ギルドが調べるんだ。ほっとけ。」

主人はさっさと下山してしまった。

ナイトもそのまま立ち去ることしかできなかった。

帰り道はゆっくりだったが、お互い無言が続いた。

ギルドのカウンターで報酬の確認をすると、そのまま宿泊先へ向かった。

「むむむ…、おかしいにゃあ。」

宿泊先の夕ごはんを食べながら難しい顔をしているナイトに主人が声をかけてくれる。

「こんなおいしいご飯に、そんな難しい顔してちや怒られるぞ。」

「だって、あのティガレックス…。」

「まだ言ってるの？確かに異様な状態だったけど、そんなティガレックスだったってだけじゃないか。」

「そうだけども。」

それきりナイトは言い返せなかった。

ただの思い過ごしならいいけれど、とその夜は眠れぬ夜を過ごした。

## 4 : 5 ・ 休息

ナイトが目を開けると、窓の外はすっかり朝の光を届けていた。

「うん、朝、にや。」

昨日はティガレックスのこと、ご主人様のこといろいろ考えてあまり眠れなかった。

隣にはすでにご主人様の姿はなかった。

あまりうるさく言うから置いてかれたのにや。

ガチャ。

ドアの開く音がした。

「おうい、ナイト。珍しく寝坊かあーつ。」

ご主人がドアを開けて部屋に入ってきた。

「ご主人様……………、どうして……………」

「ん？ちと腹減ったから、飯買いに行ってたんだ。食つか？こんがり肉たぜ。」

置いてかれたかと思った。

なんて馬鹿なこと思ってたんだろう。

「……………食べるにゃ。」

ぼそつとつぶやき、ご主人様の元へより、ごんがり肉を受けとってそれを頬張った。

おいしいにゃ。

ナイトの目にはちっちゃな涙が浮かんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2196m/>

---

朱き龍の伝説

2010年10月26日17時08分発行